

敵討

西國順禮女武勇

下

西國順禮女武勇

西國順禮女武勇

[illegible][illegible]

是より先か——本を述ぶるも是れ人皇の御代
と云ふ事あり八宝の月を奉る事ありと云ふ事あり
もあきぬの十三年乃祥月命と云ふ事ありと云ふ事あり
結句ありと云ふ事あり——此れを述ぶるも悲しき事
と云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
口説つて語りて古事と云ふ事ありと云ふ事あり
而して諸君も亦て是と云ふ事ありと云ふ事あり
に教訓と云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
あられなり又詳に云ふ内は乳母や中女や——づれ違
りたれどもある事あり——此れ大に悲しき事あり

海原よりあらたれバ野宿を——みそたてに
ある——或る人の形下はねてをいふれたりと云ふ事あり
御難き是をとりて血を流——人さきより御難き
やうにてある事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
大なる事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
ある事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
いふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
と云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
是の事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
是の事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり

是言後後母の爲に遊められさるるふあるくを子
後、下、^{あきら}此の如き如きといふ養育は存のゆり
あはるるふ及ぶる力を海母の教をうて芝
とふんを辟く交ひひるさる今日只今月分一少
せられし則に彼らと氏通をのりてはるは是傳
音無の海平後星華の花はゆける人化の如
指の如き如き如き後見は半の如き如き如き
一々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
相りていづる如き如き如き如き如き如き如き
うととととととととととととととととととと
まふもまふもまふもまふもまふもまふもまふ
てふとてふとてふとてふとてふとてふとてふ

後智と名なり是は後世より若くは若人のいふや
さるるなり

奉順禮西國三十三所觀世音菩薩爲二世安樂
之福六年酉八月勢州飯高郡河波曾村嘉六妻種
行年三十一歳と後めりて満月くや経後後と後
見ると早き後後とてふとてふとてふとてふと
家所を移してぬき一上りて人にて遊
るなりこれ後後とてふとてふとてふとてふと
お屋をよし時の如き如き如き如き如き如き
いれは前なるなりをよきとてふとてふとてふ
むるなり必なりとてふとてふとてふとてふと
それなりとてふとてふとてふとてふとてふと

概して二十二年の形勢の概をいふに
より諸國は其の形勢をもちて其の内に
たのちをもちて其の中へ入るるを
編纂せしめり其の形勢の正面に
奉納大御所御日本廻國二十二年
と書けりこれを其の形勢の中にも
ハ証數をさげ念傳の意とあれ
より付

説曰く其の形勢の概をいふに
そはておとそ七葉の形勢をいふに
正統の形勢をいふに其の形勢をいふに
其の形勢をいふに其の形勢をいふに

其の形勢をいふに其の形勢をいふに
其の形勢をいふに其の形勢をいふに
其の形勢をいふに其の形勢をいふに
其の形勢をいふに其の形勢をいふに

西國の形勢をいふに其の形勢をいふに

西國の形勢をいふに其の形勢をいふに

其の形勢をいふに其の形勢をいふに
其の形勢をいふに其の形勢をいふに
其の形勢をいふに其の形勢をいふに
其の形勢をいふに其の形勢をいふに

其の形勢をいふに其の形勢をいふに
其の形勢をいふに其の形勢をいふに
其の形勢をいふに其の形勢をいふに
其の形勢をいふに其の形勢をいふに

[illegible][illegible]

[illegible][illegible][illegible]

時ハキミを頼みて務屋をやり神妙に務屋を出
 走りと一泊されしお宿を頼みの方針を
 ありけれハキミ之より對等の見物人ハひつそり
 首と之の親目もあらむ見物と偽り居りしを
 長方あらしてすしとて女を奪ふにあらむ
 人殿十二年の前の九月にあらむ長方殿の
 られ一匹の切りの生を奪ふとつかりある
 ともあらむ一方恨とて人殿とひけれハ
 人殿は神妙あらむとて感入るに
 原ハ時の通ふれハ司理とせぬ随分お精
 ねあらむ内々を何事少知らばお宿
 守事とて國を力とてと極めて目とて

[illegible]

成をさるつてかきも既におまへ
 見之れハ驚き見おすやあまへ
 汗をまり行と云やりて見るお
 りヤあまへおまへはち力筋自
 と切しりねぬ道の人陰さる屋
 是れの人より色をあー巻を
 ま一回ききとけおまへちあ
 ま六纏十の事おまへちあ
 本形く一の名ひ強き一念
 え難立おまへちあ
 今かあ人を見かけし
 おりおまへの心を志せん

人様をとりかまふ中に入敷方へ引取りければ是れ
お徳も取違ふ外科の醫師お方々々々々々々々々々々
業々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

西國順禮女武勇卷之十四終

西國順礼女武勇卷之十五

此等之類大福義人也
 所記之事

邪て正をば
惡き者を縁とて子も異成哉や
去りて久く遠方界に於て大端義人あり終主
の女を切事安んず次は神佛の力を以て縁結ぶ所
之有程なく後所より二番の方處をおられバみ芽

[illegible]

[illegible]

世より其の故を付く日本國中一君とありて一
 下稀ある娘を其方の難をけり進所いふ思ふを
 世より評判しあひるを今更後梅しと詮ふ
 人々顔を見ても西目あらば是を尊とあけてぬ
 とけひ即進て七年の極月に空をわ果たりて
 天邊に昇る邪心と照し流し帝一明し既其
 てとふ便に其の憐れとて人々をさそふ一確
 初なる人々の武をさふりて百石の知れし
 之をさふとてさう東紫島に基ひとひく
 人々の後ある人の儀を身うけて恥辱を
 終る病をさし終る娘をさふとてさう
 其身をさうとて是を金と天國なり思ふ人々

相より念面如蓮も高代と云々西國九州長
崎より中國節婦を油断一平修の要社
其佛現る所多く以てたのりして古くは
村に降りて常念佛の如く居るを法に教ふる
住居一常行の念の念佛圓の行者とあり一星
霜積りて念面正徳子に月名に子年八歳
して生るをり又妙蓮と云々念面十二の歳と云
保十年八月十八日年八歳に降誕念面西宮如來の末
如とあり生るをり一穴窟

多付國必乳母身身卷の十上大虎

明治十一年甲三月
寫之

十二歳

本鹿村
奥谷小治郎

小
連
於
致
太
天
類
古
呂